



現状と課題

OR4埼玉県学力・学習状況調査において、県の平均正答率を下回っている。県との差は次の通り。

- 4年 国語-4.4 算数-2.5
- 5年 国語-3.4 算数-2.2
- 6年 国語-3.9 算数-8.2

○学力の二極化が見られ、特に算数では、下位3レベルに属する児童の割合が国語に比べ多く、学年が上がるにつれ増加する傾向である。

- 4年13.98% 5年26.66% 6年39.39%

○学習方略、非認知能力の平均値は県とほぼ同等であるが、個人差が大きい。

現状と課題をもとにした仮説

「自律的に自己の能力開発に取り組む児童の育成」
～100%の努力ができる児童の育成～

仮説1

学級力向上を意識した活動を通して、児童の非認知能力を向上させれば、前向きに努力する児童が育つだろう。

仮説2

学習方略の工夫により、児童に達成感を味わわせれば、自ら学ぼうとする児童が育つだろう。

事業実施報告

- 【通年】TT、少人数指導
- 【通年】アチーブテスト
- 6月24日 職員研修
- 8月24日 県学調分析
- 11月11日 3年授業研究会
- 11月25日 4年授業研究会
- 1月27日 スクラム訪問

仮説をもとにした取組内容

取組①指導体制の工夫

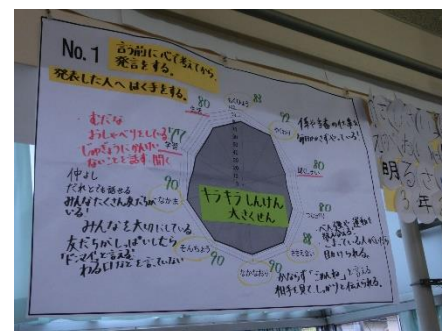
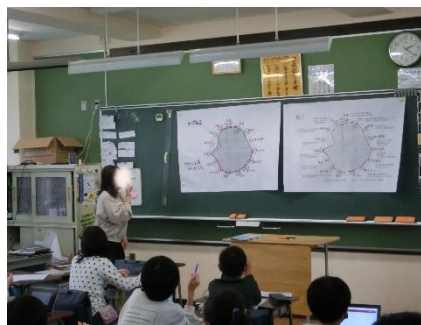
- 国語科、算数科におけるTT指導。
- 個人カルテや到達度チェック表、学習方略アンケートによる児童実態把握。
- 算数科における習熟度別少人数指導。
毎時間の振り返りを確実にを行い、児童が自身の学習状況を自覚できるようにし、児童自らがクラスを選択できるようにしている。

取組②学習方略の工夫

- 課題と振り返りを大切にした授業展開の工夫。
- 理解度に応じたヒントカードの活用。
- 意図的な座席配置により、話し合い活動を充実。
- GIGAスクール端末を活用した多様な意見交流。
- 家庭学習における手引き、GIGAスクール端末の活用。
- アチーブテストの継続的な実施。
県作成の「学力向上ワークシート」を活用し、2週間に1度のテストに向け計画的に学習し、小さな目標を繰り返し達成させることで、多くの児童ができる喜びを味わえるようにしている。

取組③非認知能力を高める工夫

- 学級力アンケート。
2か月に1度実施し、その結果をもとに児童と教師が学級のよさや課題を把握する。児童と教師と一緒に学級の課題解決策等を考え取り組むことで、児童が自律的・自発的に行動するようになり、その結果、学級力が向上する。





現時点での成果

成果①学力を伸ばした児童の割合

○令和5年度5年生・6年生の「伸びた児童の割合」は国語・算数ともに県の割合と比較し上回っており、特に5年生の国語における学力の伸び率は、県平均を大きく上回っている。

A小学校 (現5年生)	学力を伸ばした児童生徒の割合 (%)		学力の伸び率 (R5学力のレベルとR4学力のレベルの差の平均)	
	国語	算数	国語	算数
埼玉県	80.2	67.0	3.0	1.8
A小学校	87.8	71.1	4.6	2.0

A小学校 (現6年生)	学力を伸ばした児童生徒の割合 (%)		学力の伸び率 (R5学力のレベルとR4学力のレベルの差の平均)	
	国語	算数	国語	算数
埼玉県	77.7	57.7	2.6	1.1
A小学校	77.8	61.1	2.9	1.2

成果②平均正答率の向上

○「県平均正答率との差」は、令和5年度5年生・6年生の国語・算数共に縮小してきている。令和3年度より令和4年度、令和4年度より令和5年度と、年々平均正答率が県の平均正答率に近づいていることから、学校全体の基礎学力の定着が図られるとともに、学力が着実に向上していることがわかる。

【県平均正答率との差】			
○国語	全ての項目で年々向上している		
	令和3年度	令和4年度	令和5年度
令和4年度第4学年		-4.4	0.2
令和4年度第5学年	-3.6	-3.4	-2.8
○算数	令和3年度	令和4年度	令和5年度
令和4年度第4学年		-2.5	-1.5
令和4年度第5学年	-4.7	-3.9	-3.4

成果③非認知能力(自己効力感)の向上

○5年生の自己効力感が伸びた。TTや習熟度別学習指導を充実させたことで、達成感を味わえた児童が増加したと思われる。4年生についても、高い数値を示しており、一定の効果が得られたが、6年生の数値が下がったことについては、更なる分析が必要である。

自己効力感 (県学調)			
		令和4年度	令和5年度
現4年生	A小学校		3.7
	埼玉県		3.7
現5年生	A小学校	3.5	3.6
	埼玉県	3.5	3.5
現6年生	A小学校	3.5	3.4
	埼玉県	3.3	3.5

課題及び次年度に向けて

- 基礎学力の定着と学力が低い児童への個別指導に力を入れてきたが、特に算数においては、学習内容を遡っての学習が必要不可欠であり、より丁寧な個別指導を継続的に行っていく必要がある。また、学力が高い児童への発展的な指導にも配慮が必要である。
- 非認知能力(自己効力感)の向上については、即効性が難しい部分でもあるので、児童一人一人が達成感を味わうことができるような授業実践をコツコツと積み重ねていきたい。

結果ではなく「努力」する過程にこそ価値があることを教職員が共有し、学習面だけでなく、運動や生活においても「100%の努力をする児童」の育成を目指している。「努力のつぼ」は努力は目に見えないが、自分の中で力となり、いつか目に見える形で溢れ出すことを示している。

